

「忠度」



昨年十月、わが入来町は町村合併により薩摩川内市入来町となった。今年平成十七年度の薪能演目を選んでいるうちにふと「忠度」が閃いた。ご存じ「薩摩守忠度」である。

戦後の混乱困窮期に育った私たちの年代では「サツマノカミ」は懐かしい言葉である。それは忠度の「タダノリ」をもじって無賃乗車の代名詞だったからだ。ついでに云えば、「キセル」は、前後の改札の部分だけ定期などですり抜けて、中間の電車賃をごまかす手法で、貧しかった学生たちの編み出したセコイ節約手段であった。現在は自動改札になつて、正しい切符でなければ堰はピタ

りと閉まったままで、通り抜けることは出来ない。今ではもうどちらも死語となった。

今回の合併で、川薩地方は大きく二つに分かれ、薩摩川内市とさつま町になった。この門出を祝つての演目に「さつま」の語にちなんだ「忠度」はどうだろうと思つた。時あたかもNHKの大河ドラマは「義経」である。

平忠度は清盛の腹ちがいの弟である。武芸も歌道もよくした、まさに文武両道に長けた武將だった。戦前の国語の教科書には、何編かの文語体の文章が挿入されていて、平家物語の一節「忠度の都落の事」も載つていた。

忠度は木曾義仲に都を追われ福原へ向かうが、途中引き返して、和歌

の師藤原俊成に自分の歌の中から百
余首を書き集めた巻物を預け、勅撰
和歌集を編まれる時は、この中に一
首でもよいものがあつたら載せてほ
しいと言ひ残して西へと落ちて行く。

「三位（俊成）、後をはるかに見
送つて立たれたれば、忠度の声とお
ぼしくて、「前途ほど遠し、思を雁山
の夕の雲に馳す」と高らかに口ずさ
み給へば、俊成の卿も、いとどあは
れにおぼえて、涙をおさへて入り給
ひぬ」 「件の巻物の中に、さりぬ
べき歌いくらもありけれども、その
身勅堪の人なれば名字をばあらはさ
れず、故郷の花といふ題にてよまれ
たりける歌一首ぞ、「よみ人知ら
ず」と入れられける。
さざなみや志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山桜かな

その身朝敵となりぬる上は、仔細に
及ばずといひながら、うらめしかり
しことどもなり」

教科書ではここまでだが、平家物
語の明文の一端を伺うことが出来る
だろう。

その後、義仲を討ち取つた義経か
らの攻撃を、一の谷で受けた平家一
族は散々に敗れ、多くの武將をここ
で失う。「忠度最期の事」も哀切で
ある。

一の谷から退く途中、忠度は武蔵
の国の住人岡部の六彌太に討ち取ら
れる。

「よい首討ち奉つたりとは思へど
も、名をば誰とも知らざりけるが、
箆に結びつけられたる文を取つて見
ければ、旅宿の花といふ題にて、歌
をぞ一首よまれたる。

行きくれて木の下陰を宿とせば
花や今宵のあるじならまし

忠度と書かれたりける故にこそ、
薩摩守とは知りてけれ」

六彌太は太刀に首を刺し、忠度を
討ち取ったことを大音声で名乗る。

「敵も味方もこれを聞いて「あない
とほし、武芸にも歌道にもすぐれて、
よき大將軍におはしつる人を」とて、
みな鎧の袖ぞぬらしける」

能ではこの忠度の無念さを舞で表
現する。

この一の谷の悲劇は、小学唱歌の
「青葉の笛」という題で広く歌われ
た。一番は熊谷次郎直実に討たれた
美少年平敦盛を、二番は忠度を歌っ
ている。

五六年前、NHKラジオの番組
「人生に三つの歌あり」で、歌人岡

野弘彦が第一に挙げたのがこの「青
葉の笛」であった。幼時に母親がよ
く歌ってくれたという。愛情細やか
な母親に、びつたりと寄り添ってい
る明治の子供の姿が臉に浮かんだ。

私の時代には、戦時下だったから
忠義を掲げた戦争の歌に取って代わ
られてしまっていた。ある子供たち
の会合で兄を持つ美人の友人が歌っ
たことがあり、そのしみじみとした
哀調は忘れられないものになっ
た。

インターネットで「青葉の笛」を
開いてみると、タンタタとギター
の調べが流れて来る。繰り返し流れ
るので、しばらく何回も聞き入った。
今年の「入来薪能」のホームページ
には是非この曲を入れたいと思う。